

潮騒通信

潮騒ジョブトレーニングセンター

Drugs and Alcohol Addiction Rehabilitation Center

一部 100円

どっかい生きてます!



潮騒ジョブトレーニングセンター大運動会が3月19日(日)、行方市の北浦湖岸にある茨城県立白浜少年自然の家の芝生広場でありました。これまでは合宿プログラムの中で実施しましたが、今回は家族会や支援者有志の参加を得て独立した一日の日程とし、充実した内容となりました。主役の入寮者が終日を目いっぱい楽しむプログラム構成で、みんな童心に帰っていい意味での“勝負”の醍醐味とチームワークの大切さを実感していました。(詳細は次号)

2017

3

私の「埋め合わせ」は 日本中の人達に向かっている



待ちわびた春です。冬の間に縮こまった体を解きほぐし、気持ちも前向きになったところで、今月は私達が毎日取り組む回復のプログラム(12ステップ)の「埋め合わせ」について考えます。12ステップは解釈するものではなく、実際に行うことによって体得していく、回復に向けての段階的な道しるべです。“鯛の頭も信心から”ではありませんが、自分をスピリチュアルに目覚めさせてくれる「魔法の杖」です。難しいことは分かりませんが、ある意味で教義を持たない自然信仰に近い宗教的な行為かもしれません。ステップは1～3で当事者が「薬物やアルコール、ギャンブルへの無力を認め」「自分を超越する偉大な力を信じられるようになり」「自分をハイヤーパワーにゆだねる決心をした」とあります。これだけでも得心するのは難しいのですが、1～3をクリアするとステップ4で自分自身の「棚卸し」表を作成します。棚卸しはスーパーなどで月末に行われる商品の在庫管理ですが、依存症の世界でも当事者の回復には避けて通れない、大事な過去の自己点検作業です。これがきちんとできれば、今まで自分が傷つけたすべての人達に「埋め合わせをしたい」という気持ちになります。では、私にとっての「埋め合わせ」作業とはどんなものなのでしょう？

ダルクを代表する近藤恒夫さんと茨城ダルクの岩井喜代仁さんが40代前半でダルクに繋がったの比べると、私は60歳での繋がりでですから遅咲きの回復者です。二人には懲役刑の体験はありませんが、私は7回も刑務所を経験しています。その意味で二人とは比べようもないほど多くの人を巻き込み、苦しめてきた訳です。私は少年時代からアルコールに溺れ、25歳で覚醒剤に手を出してからは60歳までの35年間、実に1万2775日の長きにわたり直接・間接に周囲の人達を傷つけ、不幸にしてきた罪深い過去を背負っています。「埋め合わせ」をしなければならない人達は生半可な数ではありません。でも、生身の人間ですから実際に係わる人達には物理的に限界があります。それだけに、私が「埋め合わせ」をしなければならない人達が、自分の視界から数多くこぼれ落ちているはずです。その人達にどうしたら「埋め合わせ」ができるのだろうか…。

そう考えると私は、「人知れず苦しんでいる仲間を一人でも多く多く助けたい」という焦慮に駆られます。これが私のパワーとなって少しずつ実を結び、結果的に潮騒JTCをダルクの施設規模に膨れ上がらせたのだと理解しています。その評価はおくとして、私にとっての「埋め合わせ」のビジョンは日本中の人達に向けてしなければなりません。私の依存歴＝1万2775日は無駄ではなく、すべて今に繋がっており、今日一日のためにあるのだと言えます。でも74歳の私に残された時間はそう多くはありません。だから私の「埋め合わせ」作業はあの世も続きます。メッセージ活動と同じように、潮騒の仲間達も引き継いでくれるでしょう。私がハイヤーパワーから与えられた回復の尊さ、しらふで生きることの素晴らしさを、できる限り多くの人達に手渡していきたいと考える今日この頃です。

(センター長 栗原 豊)

潮騒アディクションセミナー

地域の 自助グループメンバーが 熱いメッセージ



都合により先月号で紹介できませんでしたが、社会で生活する自助グループメンバーから貴重なメッセージを受ける「潮騒アディクションセミナー」が1月29日、男性は潮騒アディクションビレッジ会館で、女性は鹿嶋市まちづくり市民センターでそれぞれ開かれ、スピーカーの話に耳を傾けました。栗原センター長の古くからの支援者で、アルコール依存症の優れた回復者である恵一朗さんの尽力により、約3カ月ごとに開かれています。リハビリ施設への入所ではなく、地域社会で生活するアルコール、薬物、ギャンブル依存症の仲間たちから毎回、貴重なメッセージが届けられ、入寮者に勇気と希望を与えています。今回も主に千葉県や埼玉県内のアルコールや薬物、ギャンブル依存症の仲間達が、「自助グループに参加して自分がどう変わったか」を主テーマにメッセージに立ちました。

学生時代から競馬にのめり込んで身を滅ぼしたというギャンブル依存症の男性は、場外馬券場に通ってカードローン地獄にはまり、返せなくなると親が肩代わりして尻拭い。結婚しても、子供ができて、やめられずについに離婚、「周囲から孤立してもなおやめられなかったのが、GAにつながってやっとストップしている」「家族のためにと考えているうちはダメ。すべてを失い自分の問題だと気づいた時に初めて回復のルールに乗れた。仲間と12ステップで自分は生まれ変わった」としみじみ話してくれました。

若い頃にシンナーや覚醒剤の薬物依存に始まり、次いでパチンコ依存、やがてアルコール依存…と依存対象を変えながら苦しんだ男性は、「自分にはみんないいものだっただけにやめるのが大変だった。10年前に自助グループの仲間と出会ってアルコールをストップできている」と言い、「私のような根の深い依存症でも、やめてよかったと思える小さな気づきを少しずつ積み重ねることで回復できている」と熱くメッセージしてくれました。

なお、この日男性とは別会場で貴重なメッセージを受け取った女性ハウスのメンバー二人から、以下の感想が寄せられました。(み)

れいこ 感想文

潮騒アディクションセミナーでは、懐かしい方々と再会することが出来ました。仲間の皆さんの話を聞きながら、依存症は決して一人では回復することは出来ず、「仲間がいるからこそ!」という考えが自分の中でとても大きなものだと感じました。「仲間」を大切に、そして自分自身も「仲間」の一員に!とても充実した一日でした。

いるか 感想文

ギャンブルの人の話に共感が持てました。「みるみる内に借金が増えていった」と話していましたが、私もギャンブルにハマり千円で14万円になったことがありました。これでスロットにハマり、サラ金から借りるだけ借りて、ブラックリストにも載りました。もう借りられなくなって、今度は友達に借りるようになりましたが、最後は誰も貸してくれなくなりました。今では、本当に馬鹿なことをしたなと思っています。もうギャンブルは懲り懲りです。今はお金を大切に使いたいです。



安全安心に、楽しく回復を目指す女性達の居場所に、自立と社会復帰を目指し支援プログラムに取り組む

2017 シリーズ企画

潮騒ジョブって
どんな
施設なの？



その2

女性ハウス 「るみの家」



皆様こんにちは。女性ハウス「るみの家」の施設長の栗原ルミです。広報部の依頼により、女性ハウスの活動を紹介させていただきます。

男性に比べ回復が難しいとされる女性依存症者。人口の半分は女性なのに、全国に女性専用の支援施設は数えるほどです。そんな中、潮騒 JTC 女性ハウス「るみの家」は、各種依存症に苦しむ女性達の居場所として少しずつ信頼を高めています。ハイヤーパワーから与えられたギフト(贈り物)ですが、この個性的なネーミングの名付け親は栗原豊センター長です。パートナーでアルコール依存症の栗原ルミさんが、その個性的すぎる(?)自身の半生を踏まえ、12ステップを使って「自分を変える」努力をしていることを目の当たりにしてきたことから、「回復には仲間との絆が不可欠」(栗原センター長)として同じ病気に苦しむ女性の仲間と共に回復を目指せるように、との願いを込めました。この国では、ともすると個性的であることが疎まれ、出る杭となって打たれます。依存症もある意味で個性とするなら、なお更当事者は生きづらさを抱え、苦勞の多い孤立した人生を背負わされます。それだけに「るみの家」では、ルミさんの“個性的なリーダーシップ”で女性メンバーが安心安全に、楽しく回復を目指せる居場所づくりに取り組んでいます。(広報部)

当初より男女関係 「13 ステップ」問題に悩む

潮騒ジョブトレーニングセンターでは、既に2012年(平成24年)1月から潜在ニーズを受けて、現在の下津ナイトケア施設の2階フロアの一部で試行的にシェルター(一時保護、緊急避難所)として女性入寮者を受け付けてい

ました。当初のメンバーは3人ほどで、プログラムとして夜間の自助グループに男性陣と一緒に参加していました。問題なく進んでいくかと思いましたが、女性入寮者が増え始めると“まさか”の問題が発生しました。男女の恋愛、いわゆる「13ステップ」問題です。当時は独立した女性専用のプログラムがなく、男女混合のプログラムでしたので、まずこれを改めました。

とりあえずプログラムを男女別々にして、女性部門担当の私も監視の目を強化することにしました。当然ながら仲間達からは、「自由度がない」と不平不満の声が上がりました。施設内はピリピリした空気が広がり、私も神経をすり減らす日々でした。もちろん部屋は男女別々でしたが、比較的規模の大きな施設とはいえ同じ建物内で生活していますから、私の目などお構いなしに男女の関係ができてしまいます。私の偏見かもしれませんが、依存症者はなぜか男女ともそうした性向が強く、この方面での関係づくりが上手いように思います(笑)。確かに世の中は男性と女性で構成されていますから、一般社会でなら男女関係が生まれるのはごく自然の摂理として歓迎すべきなのですが、依存症者の場合はそう単純ではありません。

特にリハビリ施設においては、本来の目的である回復活動をたやすく妨げる要因となります。本来の回復プログラムの実践そっちのけで、目先の刹那的な疑似恋愛のような関係におぼれ、それが手っ取り早い現実逃避の手段となってしまう、男女とも簡単にスリップして自滅の道を突き進みます。そのためダルクではほぼ共通して施設

生活では男女の恋愛やセックスを禁じているほどです。百歩譲って男女関係の問題は避けられないとしても、女性の場合は「寂しさの病」とされる依存症への耐性が比較的弱く、しかも結果として引き受けなければならない精神的かつ肉体的なダメージはとても大きく、時には性暴力や望まない妊娠などで被害者ともなります。

「おらげのかまど」や「百寿亭」で 就労体験プログラム

こうした試行錯誤の末に潮騒 JTC では女性ハウスを独立させることを決め、平成 26 年に鹿行地域では初めて、私が待ち望んだ女性専用施設を設立させました。女性専用のシェルターでもあるので場所は非公開ですが、潜在する女性依存症者の福音となっています。現在は 12 人が入寮しており、メンバーの依存対象も薬物、アルコール、ギャンブル、摂食障害、重複障害、クレプトマニア(病的窃盗)など多岐にわたります。最近は刑務所経験者が増え、基本活動である一日 3 回のミーティングでは回復のプログラムが足りず、運動や生活訓練に太鼓のプログラムを取り入れています。ミーティングだけだった時より活動範囲が増え、みんな健康的になってきています。一方で就労プログラムにも取り組み、ある程度回復が進んだ仲間達が潮騒食堂「おらげのかまど」で接客サービスや皿洗いなどの体験プログラムに参加したり、関連施設の高齢者デイケア「百寿亭」での介護ヘルパー体験に加わったりと手を広げました。しかし、ここでもまたもや男女関係の問題が浮上し、さらに仕事をしていると社会でもやっていけると勘違いしてしまう「治っちゃった」病が頭をもたげ、プログラムを放棄して途中退寮や施設“脱走”を図るメンバーが見られました。このことで施設側は、回復のレベルと就労への取り組みの介入時期の見極めの難しさ、を思い知らされました。今は介護ヘルパーの仕事プログラムは保留になっていますが、開店当初から「かまど」に参加している二人のメンバーはスリッパすることなく頑張っています。

一般に依存症の関連施設ではなかなか困難とされる就労プログラムですが、「るみの家」では就労継続支援 B 型(障害者総合支援法)の施設に認可され、平成 28 年から女性施設内の作業所「ひだまり」での取り組みが始まりました。作業所は男性施設の作業隊と農業隊のメンバーの尽力で建設されました。とても感謝しています。作業は、クラフトテープを使つての工芸品作り(バッグ、かご、小物入れ等)、ポストカード制作、冊子広告の折り込みなど内職作業に取り組んでいます。また季節限定で

すが、農業隊が生産した干しイモや冷凍焼きイモの袋詰めにと大忙しの日々です。これらは予約が入って、すぐ売り切れます。年間行事では秋の潮騒フォーラムをメインにフリーマーケットやお祭りなどでクラフト工芸品の展示・販売、さらにレクリエーション・プログラムとしてエイサー(琉球太鼓)にも力を入れ、要請があれば男性メンバーに伍して行事ごとに参加し、演舞させてもらっています。「るみの家」には犬が二匹、ネコが三匹も一緒に生活しており、仲間達のセラピードッグ & キャットになっています。生活訓練では当番制で掃除、食事作り、食材の買い出しを毎日行い、社会復帰に向け自立心を養っています。メンバーが喜ぶプログラムは①(食べ放題の)食卓会 ②カラオケ ③日帰り温泉入浴一です。

焦らずに無理なく、 楽しく回復しながら成長を促す

そんな形で施設生活が営まれている「るみの家」ですが、課題は女性スタッフの育成です。これまでに何人かの仲間がスタッフ研修や実際にスタッフとして回復してくれたのですが、「よい回復をしている」と思っていると退寮したり、自分勝手に“脱走”するケースに遭遇したり、スタッフという肩書が重荷になってスリッパしたり、潰れたり…というように、私が思い描くようには育ってくれません。スタッフ育成では難しさを痛感させられていますが、今は若い仲間が有給スタッフを目標に頑張っています。その姿が励みになり、後に続こうと 2~3 人の仲間が意欲を見せています。焦らずに無理なく、楽しく回復しながら成長していったほしいものです。

「施設にはスリッパはつきもの。でも、当事者がやり直したい、やめたいと助けを求めるなら許して受け入れることだよ」というセンター長の深い人間観と息の長いビジョンに学びながら、私も懐の広い回復者を目指しています。10 年前には、私が女性ハウスの責任者になるなんて考えてもいませんでしたが、「問題なのは依存症という病気。その人が悪い訳じゃない。社会では受け入れられなくても、一人前として通用しないと匙を投げられても、私達にとっては大事な同じ仲間。例え失敗しても何度でも受け入れてほしい」というセンター長の言葉が、今ではよく理解できるようになりました。「るみの家」が必要な人にはいつでも門戸を開いています。待っています。ぜひ、来てください!最後に欲張りかもしれませんが、作業所「ひだまり」に作品販売所が持たたらいいなあと思います。お菓子作りもしたいです。欲張りすぎかもしれませんが、神様どうかこの夢が叶いますように!(ルミ)

第14回【最終回】「ユタカはダルクに収まらない人間だ」(近藤恒夫さん)

ユタカ vs トム 対談

単独で大規模な運動会を開けるまでに力をつけた潮騒 JTC。▶
栗原センター長の枠に収まらない自由な発想と行動が原動力になっている



——前回、三重ダルクの取り組みから学ぶものが多いという話が尻切れとなっていました。そこから話を進めてください。そして年度切り替えなので、いちおう今回で、この対談も終えたいと思います。(司会進行・広報部)

「生きるを支える」三重ダルクの先進的な取り組み

トム 依存症の世界も近藤恒夫さんや僕らが盛んに動いていた頃と比べると、状況はずいぶんと様変わりしました。ここ30年の間に、多様化や高齢化を含めいろんな変化が見られます。ダルクの基本原則は変わらないとしても、個々の部分では変化してきています。施設の運営スタイルや色合い、リーダーの個性も反映して、多様化した回復のニーズにも応えられるようになりました。

その一方、家族会の働き掛けなどもあって依存症対策では国も重い腰を上げ始めていますし、外部の支援の形も幅が広がり、厚みが増えました。それらを踏まえた先進的プロジェクトに取り組んでいるのが三重ダルクです。タケゾーさんがよく言う「生きるを支える」取り組みが、ダルクの今を象徴しています。重複障害、精神疾患、軽度の知的障害、発達障害…、以前からそうした要素はあったけれど、もはや依存症で括るのが困難な人達がダルクに登場している時代です。そういう人達が生きることを支えなくちゃいけない。そのために三重ダルクでは地域の特性を生かしたユニークな事業にトライして、困難な状況に風穴を開けようとしています。

——少し遅れて潮騒 JTCも同じような問題意識で農業にトライしました。潮騒は就労支援に特化する形で活路を開こうしている訳ですが、センター長どうですか。

ユタカ 潮騒は私達の自助努力を支える客観的な条件に恵まれたことが大きいと思う。トムさんが指摘してくれた地の利です。偶然か必然か、ハイヤーパワーの計画によって鹿嶋という地に不思議な縁ができた。その流れで

農業ができる環境が与えられた訳です。

あと必要なのは潮騒で死んだ人達が永眠できる墓地

トム 今までの習慣で、ダルクでは自らが賃仕事をしたり、作業する場所や広い畑などに出資するという発想はあまりなかった。外からの出資や支援は求めるけど、なかなか自分達には投資しない。ましてや自力で就労環境を整えようなんていう方向には問題意識が向かわない流れできました。それが潮騒では、自力で農場を整備して独自の職業訓練の場として生産から加工、消費までを行える仕組みを創り上げた。さらに高齢で働けなくなっても介護サービスが受けられるよう、自力で高齢者介護の福祉事業にも参入しています。

ユタカ あと必要なのは潮騒で亡くなった人達が永眠できるような、潮騒専用の墓地ですね(笑)。ほとんどが家族とは疎遠になっていますから…。

トム 既存の形でいえばソーバーリビング(共同生活援助、宿泊型自立訓練施設)の一つのモデルだと言っていると思います。どこのダルクもみんな忙しくて、そうした取り組みに向かう時間がないのかもしれないけど、その壁を潮騒は自力で突破してきた…。

——ダルクの中には本音では就労支援をやりたいけど、それを担えるマンパワーの問題に加え、従来のダルクの枠に縛られてできない、っていう側面はありませんか？ 人的にも予算的にも余計な仕事や負担が増えるので腰が引けちゃう面もあるように思えますけど、どうですか？

トム そういう面もあるでしょうね。それ以前にダルクは30年以上の歴史を刻んで個性豊かな若手リーダーが育っている割に、何もかも一緒という発想に陥りがちです。仲間意識が強いのはいいとして、その強さがお互いの足を引っ張り合って冒険を嫌うというか、自由な発想

を疎外している。出る杭となるのを恐れたりする保守性みたいなものが、いつの間にか身に付いた。行政にありがちな、前年・前例踏襲が一番楽ですからね。自分達の既得権を守ろうという無意識が底流にあるのかもしれません。潮騒の場合は、ダルクに縛られない自由な発想がユタカさんの中にあって、それが逆境を跳ね返すパワーとなり、いろんな事にチャレンジしているように僕には映ります。

外圧や規制を恐れず 新たに北浦での漁業に挑戦

——そういえばセンター長、すぐ近くの北浦で漁業にもチャレンジしていますよね。

ユタカ 私のモットーは、詩人・金子みすゞの「みんながって、みんないい」です。過去のしがらみに囚われずに、みんなが自由に働ける環境を自力でつくりたい。「世間の常識はダルクの非常識」じゃないですが、自分を規制する世間の常識というものが、どうやら私には少ないような気がします。もちろん社会との関係においては、そうは行きません。いい加減では済まない事も多くて、私にはいらぬ誤解や反発も強くありますが、私はそうした周囲の目を気にせずとにかく動いてしまいます。

だから、外圧や規制を恐れずに漁業にも挑戦しています。これも北浦という地の利を生かしての試みです。北浦は霞ヶ浦の一部を形成する湖です。ここでの内水面水産業に手を広げようと試行錯誤しています。漁業者も高齢化が進み、後継者問題に直面しています。そうした人からは是非にと協力要請があったので、トライしたんです。ワカサギなどを佃煮に加工する機械やその作業所もあります。ただ肝心の地元漁協の漁業権問題がネックとなり、まだ実現には至りません。普通なら手を出さないでしょうが、私の場合はハイヤーパワーの計画だと思っていますから、ダメだったらしょうがない。機が熟したら、もう一度チャレンジすればいいという考えです。

——もう長い付き合いですが、トムさんはセンター長のそういう資質をどう思いますか？

トム 今思い出しても驚くのは施設を立ち上げた頃に、何度か東京地裁でユタカさんに出会ったことです。何をしているのかな？って思ったんですが、地裁で開かれる刑事裁判の法廷の入り口に張り出されている薬物事犯の被告の名前を細かくチェックしていたんですね。それをもとに東京拘置所に手紙を出していた。ユタカさんらしいメッセージ活動ですが、鹿嶋から高速バスで2時間も掛けてそこまでやるなんて、なかなかできないですよ。そういう発想もパワーも今のダルクメンバーにはないと思

います。その強い使命感には頭が下がりましたね。恐らく「なんだ、体のいい営業活動じゃないか」という陰口もあつたと思うんですよ。

地裁での被告名簿アタックは 有効なマネジメント活動

ユタカ 私にしたら一石二鳥なんです。当時は八方塞がりのスタートでしたから、私には入寮者を紹介してくれたり、供給してくれる組織も人的繋がりも何もない。自分がそうだったように囚われの身の仲間がうまく潮騒に入寮してくれれば施設の運営も安定するし、本人も助かる。ステップのメッセージ活動にも通じますから、私には違和感はなかったですね。

トム 見方を変えれば、とても有効なマネジメント活動ですよ。ある意味プロディーサーとしてのユタカさんの面目躍如です。苦勞を厭わないユタカさんだからこそできるんだと思います。そこには間違いなく霊的な力が働いています。自戒を込めて言えば、僕などは近藤さんの枠から飛び出せない。なにしろ近藤さんは偉大な回復者ですから…。そこが自分の限界というか、霊的にダメな部分かもしれません。近藤さんの近くにいれば楽ですからね。そこを突破する勇氣と度胸が大切なんだろうが、僕には捨てられないものが多すぎて困ります。もう年齢的にも断捨離のタイミングなんだろうが、なかなか身軽にはなれません。もしかして、それは近藤さんとの距離の取り方の問題なのかな、とも思うんです。僕のようなアディクトが霊的にも成長し、本当に自立していくには、近藤さんの目が届く範囲から離れた方がいいのかもしれませんが(笑)。そういう意味で、東京から100キロ離れた鹿嶋だと、近藤さんの存在を気にせずに自由にのびのび活動できる。ユタカさんを見てると、そう思ってしまう。

ユタカ いえいえ、私も近藤さんには頭が上がらない。と同時に、トムさんにはいくら感謝しても足りないぐらいです。だから、トムさんがミーティングに行ってるって聞けば、すぐに真似してミーティングに行ってしまう自分があります。今のところは体も動かし頭も何とか働きますから、やれるところまでやって自分の使命というか、運命をまっとうしたいですね。

トム いつだったか近藤さんが「ユタカはダルクに収まらない人間だ」「人をうまく育てることにたけている」と僕に話した事があります。鹿嶋の地で水を得た魚のように生き生きと活躍している姿を見ると、僕もそう思います。

——締め括りに相応しいご指摘を頂き、有難うございました。これで対談を終わります。(了)

女性ハウス 「るみの家」

各種イベントに参加した メンバーの感想集

鹿島アントラーズ優勝パレード

1月29日 鹿島神宮参道

かこ

私達はエイサーの衣装で参加しました。お蕎麦屋さんの駐車場を借りて、選手が歩いてくる前に少しですが踊りました。私は地元が近くて、昔はアントラーズの草創期を支えたジーコやアルシンド選手見たさに、よく友達と自転車で選手がよく行く焼き肉店に通いました。実際には会えなかったけど、サイン色紙などを見てはしゃいでいたのを思い出します。懐かしい中学時代です。その後は酒にギャンブル、刑務所、施設、精神科と渡り歩き、テレビすら見ない日々を送り、37歳となった私は小笠原選手しか顔が分からないのが現状です。今やっと正気(普通)の考え、行動、世の中の動きを目にし、耳で聞き、色々な事に興味を持って知っていくところです。今シーズンも頑張ってください！私は来年もパレードがあることを期待してポジション、名前を覚えるよう努力します。おめでとう！鹿島アントラーズ！

くま

エイサーメンバーとして参加しました。パレード時間よりも前から踊りを始め、混雑の中で周囲とは違った空気を漂わせていたんじゃないかな？この日のメインは自分達ではなくアントラーズ選手達だったので、気持ちの上では楽でした。通りを歩きながら、こっちを見てくれる人や、立ち止まって見てくれる人達もいました。「パーランク(=手持ちの片張り太鼓)だぁと思って…」と沖縄出身の女性が興味深く寄ってきて話しかけてくれたのも嬉しかったです。神宮への往路は人混みで全く選手達を見ることが出来ませんでした。復路では場所を確保したので見られました。みんな黒いスーツを着ていたので、選手なのか関係者なのか分からない状況で、個人的にはユニフォーム姿の選手達を見たかったです。でも、私自身この日「パーランク」の踊りが出来たことは嬉しい事でした。パレードの雰囲気の盛り上げ役として、今回のような参加もいいものだなあ、と思いました。

節分豆まきイベント

2月3日 潮騒女性ハウス「るみの家」

ゆめ

13年間私は外で節分などしていなくて久しぶりに恵方巻きを食べて、豆まきをしました。幼い頃、育ての両親と豆まきをしたのを思い出し、胸にこみ上げてくるモノがありました。また、子供達の事も思い出しました。私は子供達に何一つ思い出を残してあげられていないことを後悔しています。

たえ

豆まきをしたのは小学6年生の時以来です。私は秋田県出身で、お面は紙で出来た物ではなくて、なまはげ用のお面を付けた父に向かって、怖いながら豆を巻いていた当時を思い出しました。外に投げる豆は勿体ないからと落花生を投げていた記憶があります。以来、今まで豆まきをしたことがありません。ここに来て豆まき行事ができてとても幸せでした。鬼になった仲間二人は、少々痛かったかもしれませんが、今年の邪気をお祓いするために思いを込めて投げさせて頂きました。とても楽しかったです。

めい

季節事の行事が度々あるのは有り難い事です。私はここに来て2度目の豆まきでしたが、まさかの2年連続の「鬼役」でした。スリップしたばかりの私の中の「鬼退治」と言うことで選ばれました(笑)。もう一人の仲間もまた同じ理由で、二人揃って連続「鬼」でした。お面を被って皆に豆をぶつけられながら、素直に笑っている自分がいました。私を含め、皆に幸せが来ますようにと祈りました。今は離れて暮らしている息子と二年前まで当たり前に行っていた豆まき。息子は今年豆を蒔いたのだろうか？鬼を払えたのだろうか？とつい思います。何年先か分かりませんが、また息子と思い切り豆を蒔ける日が来ることを信じて頑張りたいです。



第6回ハートフリーマーケット

2月19日 ショッピングセンターチェリオ



※ハートフリーマーケット＝障害者就労支援事業所等合同販売会。鹿嶋市就労支援専門部会と特別支援学校や一般就労を目指して日々訓練に取り組む施設、その方の能力に応じた福祉の作業を行う施設が参加。潮騒では女性ハウスの作品以外にも農場で収穫した野菜や農産物加工品も販売しました。

なあな 私達が作ったクラフト、ポストカード、(農業隊が農場で収穫した) 干し芋等を販売しました。私は薬物を使う前にはアパレルの仕事をしていましたが、その時の感覚を思い出しました。私はやっぱり接客業が好きだなあ…と懐かしく思い、販売、声出し、接客をしていました。薬物を使わずに楽しくアパレルをやっていた時に戻りたいなあ…と思いました。でも過去には戻れません。シスター・渡辺和子の「置かれた場所で咲きなさい」は、今の私にはピッタリの言葉です。通りすがりの人から「福祉にお世話になっているのに利益を求めて…」と言われ、私自身、生活保護にお世話になるとは思わなかったもので、とても胸に突き刺さるお言葉でした。ですが、今は回復の為に必要な福祉の力、いつか自立できるように回復しよう!と思える日になりました。

くま 売り子として参加しました。ひたすら作り続けてきた作品には、みんなの頑張りが染み込んでいます。でも、以前のような売れ行きが全然ありませんでした。これまでの出店は「〇〇祭」といったイベント事だったけれど、今回は大きな祭り事でもなかったし、スーパーに買いに来た人が「あら、何かやってるのかしら…」と目を向ける程度でした。あまりアピールに力が入っていなかったのかもしれませんが、「頑張って売ろう!」という自分の思いも空振りとなってしまいました。作品は、あまり日の目をみなかったのですが、私達も手掛けた干し芋や青パパイヤ甘納豆が、思ったよりも売れていたのは嬉しかったです。自分達が手掛けたものを、他人が求めてくれる喜びを感じ取ることができ、良い経験となりました。自分の中に今まで抱いていたこともなかった思いや感覚を持つこともでき、良い勉強になったと思います。

イチさんの棚卸

第4回「日記風の回想録」

23歳の時と同じ失敗をして
成長のない自分を思い知る

前回述べたように、僕はフジさんへの恩義から広報部への復帰を決めたものの、心の中にはどこなくしっくりこない感覚が残っていました。自分の課題ときちんと向き合っていなかったからです。僕は翌日から広報部の仕事に復帰し、久しぶりに広報部室に入りました。そしてフジさんの期待に応えようと、「よーし、これからはパソコンの打ち込みに頑張るぞ!」と張り切りしました。その時期、フジさんは入寮者のユウキさんも広報部に加わってほしいと誘いを掛けていた様で、ユウキさんも快諾していました。僕は毎日、ユウキさんと一緒にデスクも隣同士で広報の作業と一緒にやるようになりました。

ユウキさんの業務は基本的には刑務所への手紙を書く事ですが、一人では追いつかない時には僕の手伝いが必要でした。でも、そこでは僕の性格上の欠点である我がままや、自分勝手な部分が顔をのぞかせてしまい、素直に手伝う事が出来ませんでした。どうしてもその仕事をやりたくない自分がいて、何度やり方を教わっても間違え、やり方を忘れてしまうのでした。そんな時、フジさんから「イチ、お前そんなにやりたくないのなら帰ってもいいぞ!」と叱責を受けました。この一言を僕はどう勘違いしたのか、本当に3Fフロアへと帰ってしまったのでした。

実は僕には23歳の頃に、とび職のアルバイトをしていた時期がありますが、思い起こすと同じ場面がありました。あの時も働いて4日目に、全くやる気の無い自分に対して、先輩の職人さんが「お前みたいにやる気の無い奴は帰ってもいいから!」と叱ったのです。その時も僕は、自分の事を反省するどころか本当に家に帰ってしまいました。それが41歳になっても全く同じ事をしているのですから、少しも人間として成長していないことを証明しているようなものです。「いつまでたっても成長も回復もしないなあ、本当に俺はどうしようもないダメ人間だなあ」と、自分でも情けなくなりました。

次の日の夕方に僕は広報部室に行き、フジさんに「昨日は御免なさい。またパソコンの作業をやらせて頂きたいと思っていますので、手紙の作業をもう一度だけ教えて下さい。お願いします」と謝りました。するとフジさんも分ってくれて、「じゃあ、もう一度だけユウキさんから教わって、手紙の作業をやってみな。これからは空いている時間にはパソコン以前に手紙の作業をやってくれよ。頼んだぞ」と言われ、僕はホッと胸をなでおろしました。それから僕の本当の広報部員としての作業が続くことになる訳です。(この項続く)

受刑者からの手紙

対話の無い一人の世界はまるで“歪みの世界”

栗原センター長、そして職員の皆様、いかがお過ごしでしょうか？ 私は元気です。お手紙、有難うございました。薬物依存症なので“許しと理解”が得られる、無力だからこそ、あがく事もせず、自然の摂理に身を任すー。私の回復へのヒントも、この中にあってと思っています。私は薬物依存症の世界にハマってから今日まで、いつも対話の中に違和感を抱いていました。相手の話も理解出来ずにいる事、自分の意思伝達をうまく出来ない事が多かったからです。

そんな中で、私は社会の枠組みから外れていく人生になりました。うまく意思疎通が出来ない悲しさによって、生きていく希望を失ってしまった様な気がします。何をする気も失せ、その結果、自分はすっかり“無気力”になってしまい、どこにも“自分の居場所”が無くなってしまったように思います。いつの間にか薬物の世界がリアルな現実であって、社会がフィクションになってしまったのです。対話の無い一人の世界は、まるで“歪みの世界”です。イライラや怒りが自然に発生して、相手構わずに放出されます。私自身、そんな異常な世界にあっても、自らが攻撃を受ける事はありませんでした。私はいつも悪くないのです。依存症者に特有の身勝手な思考に支配されていたからです。今だから、そうした事自体が狂った世界なのだと気付けるのですが…。

私にとって社会の現実空間が余り良い環境では無いから、そうした歪んだ妄想が膨らむのだと思います。だから社会復帰しても、また同じ空間に身を置いた生活に戻ってしまうと危惧します。感情の揺さぶりによって気持ちがアゲ・サゲする私です。今私が一番求めている物は何か？ “薬物に依る快樂”だけではないと思います。自分でもうまく表現出来ない、幻想を形にしたい欲望が渦巻く自分自身を巧くコントロール出来ずに、破滅へと進んで行っていると思います。そしてこんなにも複雑な私の世界の話、私の言葉で説明しても納得してくれる人はいないのです。そこに屈折が生まれるのです。

もし潮騒ジョブトレーニングセンターの方で“許しと理解”があるのならば、私はそこで生きていけると 생각합니다。感謝の気持ちを持って、人に優しく出来るはず。人間の尊厳を保ちながら堂々と生きていけると考えます。嘘が要らない、イライラも怒りもない、そんな理想の世界、対話のある生活を続けて行けるのであれば、私は薬物の無い世界で生きたいです。元の私がどんなものかは分からないけれど、原点回帰は不可能だとしても、新しい自分にはなれるかもしれません。私もセンター長やフジさんと同じ“学び舎”で勉強する事が出来たら幸せに感じます。

(茨城県 H・N)

酒と覚醒剤の違いはあれお互い目指す方向は同じ

暦の上では立春を過ぎましたが、皆様お変わりなくお過ごしでしょうか？ シゲさんはアルコール依存症との事です。18ヶ月も回復を目指して様々なプログラムに参加して頑張って居る姿が目に見えます。私はお酒は付き合い程度に飲む程度なのでアルコール依存症の方にとってはとても大変な御苦労があるのではないのでしょうか？ いっどこでも手に入り、飲もうと思えばすぐに飲める、そんな状況の中で1年6ヶ月も酒を止め続けて居るので、シゲさんは相当の覚悟があるのだと思います。シゲさんはアルコール、私は覚醒剤、お互いに違いはありますが方向は一緒なのでお互いに頑張りましょう。

私は今現在、止めさせられている身ですので、出所してからが本当の依存症回復へのスタートです。今、堀の中で出来る事は、出所後の回復へのイメージをしながら1日1日を大切に過ごして、毎日無事故で生活して1日でも早く出所出来る様に頑張り、皆様方の元へと行ける事を願って生活して居ます。(北海道 K・M)

春の訪れとともに、受刑者の手紙にもそうした季節感が感じられます。本来なら最新の手紙を掲載したいのですが、どうしても2、3か月遅れてタイムラグが生じてしまいます。返事を書いたり、掲載するにふさわしい内容かどうか、本人や刑務所が特定される恐れはないか、等の慎重な判断が求められるからです。どうか、そうした趣旨をご了承ください。

依存症回復施設に行くのは初めてで不安

シゲさんは、アルコール依存症と薬物依存症と、両方なのでしょうか？ 私は来年そちらへお世話になる予定ですが、依存症回復施設に行くのは初めてなもので右も左も解りません。シゲさんから色々とお教わるかも知れませんが、面倒をお掛けする事ばかりあると思いますが、どうか宜しくお願い致します。

現在、潮騒ジョブトレーニングセンターには何人くらい在籍者がいるのですか？ 先程も書いたのですが私もそちらに入寮予定です。でも今から緊張しています。私ももう二度と刑務所には絶対に来たくないので、二度と同じ過ちを繰り返さない為に施設に行き、回復を目標として一般社会に出て一からやり直して最後は人の為に生きようかな、と思って居ます。

シゲさんも、センターで生活してどうでしょうか？ 今まで経験した、体験した事、教えて頂けたら幸いと思っています。薬物、ギャンブル、アルコール依存症者が行うべきプログラムと言うのは、それぞれ同じ事をしていくものなののでしょうか？ それとも、各々異なる事をするのでしょうか？ その辺りの事を書面にて教えて頂ければ、と思って居ます。私の方は刑務所内で風邪をひいてしまいました。でも症状は軽かったので、今現在はピンピンして居ます。お互い健康が一番だと思いますので、お身体には充分に留意して生活して下さい。(北海道 N・S)

過去は変えられないが未来は変えられると気づく

…母から便りと一緒に5枚の写真が届きました。私の子供達の写真でした。私はその写真を事ある毎に見ています。私が捕まって2年程ですが、子供の成長にはいつもびっくりしています。長男も次男も本当に男らしく、大きくなっています。私よりも身長が伸びている様でした(笑)。長男も自分の人生の道を見つけたのか、今年から大学生になる様です。“頭の悪さは似なくて良かったな、と思うばかりです(笑)。嫁似で本当に良かった。次男も高校が決まった様です。夢がバテシエだと聞き、心から応援したいと思っています。長女も小学4年生になりました。本当に喜びで一杯です。写真を見ていて思ったのですが、表情が少し暗く感じました。やっぱり私のせいなのでは、とも考えたりもして居ます。1日も早く戻ってあげたい、と思うばかりです。

便りの中にもう一つ心配な事が書いてあって、自分の叔父なのですが、家が火事に遭ってしまい全てを無くしてしまった、と書いてありました。私が関西で生活していた時にお世話に成っていた母の弟です。私が好きな叔父でよく相談したりしていた事がありました。昔から叔父は人柄が良い人間で、今でもよく私の心配をしてくれている様です。私が現在生活している所で“今自分に何が出来るのか？”をいつも考えさせられる事が多々あります。

そんな中で「今自分に出来る事は何なのかを考えたい」「過去は変えられないけれどこれから先の未来は変えられる」という事に気づけた事が、今の自分にとって最高の恩恵なのだと思います。毎日の残刑を務めています。今の私は何かをする事、何かを生み出す事は出来ない、完全な無力の人間でしかないので。でも、そんな人間でも何人も、何十人も集まって同じ志を持てた時に皆でその目標に対して一緒に頑張ったら、その先に見える物はきっと物凄い、目に見える結果に成るのではないかと、思います。

「過去は変えられない。でもこれから先の未来を変える事は出来る。今の自分に出来ない事は沢山有る。でも、それを学ぶのは良い事で、今の時点で学んだ方が良いのだ。学びは苦ではなく、喜びなのだ!」と、シゲさんから毎回の様に教わって来ました。今の私には何も出来ないけれど、これから先の未来にはきっと何かしらの功を成し遂げて行ける様にこれから先の人生を歩んでいきたい、と思って居ます。(長崎県 F・T)

しおさい俳壇

3月のお題

雛祭り

選者 桐本石見

わが俳句人生の歩み・No.38

センター長 栗原豊

「手紙、書こうと思って、何カ月も過ぎてしまいました。いつもの悪い癖で…ごめんなさい」。この書き出しで、待ちに待った姪から初めての手紙を手にした時、獄中にあった私は小躍りして喜んだ。一方通行ながら、私の方は姪に宛てて何通も手紙を出していたから、いつ姪から便りが来るだろうかと心待ちしていた。それがやっと、私の出所する半年前に実現したのである。

手紙の内容は近況報告だった。それによると、私が収監されてた刑務所のある群馬県内の会社に3か月ほど前に就職し、いろいろと苦勞している様子が書かれていた。「私の人生のなかでちゃんとした就職はこれが初めてです。でも、なかなかうまくいかず、まだ見習い使用期間中です。人との関係から生まれる問題や、自分の思い通りにならない辛さや、そういうことと毎日闘っています。問題がおきると、自分の考え方が悪いからなのか、周りが私を受け入れないからなのか、といつも考えています。今、この瞬間にも(就職した会社を)辞めようか…と思いつつ働いています。とても辛いです。でも、次の仕事が見つかるまでは働かなければいけないと思い、頑張っています。」

ここまで読んだ時、私の目から涙がこぼれた。彼女の苦しい立場や思いが我が事として十分に分かるからだ。「ああ、姪も私と同じように生きづらさに苦しんで…」、ヤク中とは思議と同じ匂いを感じるものだ。人は依存症者として生まれてくる訳ではない。運命に呪われるように、いつの間にか依存症に魅入られてしまうのだ。理由付けに聞こえるかもしれないが、躰きの背景には、幼少からの成育環境、家庭での不安全感、自分の居場所の無さ、学校でのいじめ、人間関係の問題などがある。これまで多くの潮騒の仲間達との付き合いを経て、責任者の私はそう確信している。それらが複雑に絡み合って生きづらさに繋がり、深い孤立感や孤独感を埋め合わせる手段として、クスリやアルコール、ギャンブルに染まり、やがて抜けられない依存症地獄へと堕ちていくのだ。姪は、私にとってたった二人兄弟の実兄の子だから、余計に不憫に思えた。自分の頭のハエも追えないのに生意気いうな!と叱られるかもしれないが、出所したら頑張って姪の支え手になろう、生きている限り彼女の応援団になろうと、密かに決意した。その思いは今、不十分ながらもなんとか実現できていると自負している。

そういえば、手紙には姪の写真が同封されていた。獄中での私の宝物となり、出所日まで大切に棚に飾っておいたことを思い出した。(次号に続く)

名月や明治を残す煉瓦塀

ぼんぼりの
色に子の頬(ほほ)
雛祭り

特選句

ぼんぼりは「雪洞」と書き、茶室や神社などで使う照明だが、字の様に雪の「かまくら」を想うし、紙に透く灯りも淡く上品、また雛飾りのぼんぼりは薄紅で子供の頬の様でもある。雛飾りは女の子の祭りのので全体に紅色だし、子の着物も華やかで微笑ましい女の子を彷彿する句です。

毎年の
飾らずじまいの
雛(ひいな)かな

特選句

雛飾りは女の子の居る家庭で行うのが一般的、例えば娘も嫁いだか、孫も男ばかりか、または家庭の事情かも、それらを諸々に想い一抹の哀れを込めた句です。

車座の
長(おさ)も女子や
雛あられ

特選句

雛祭りは平安時代に雛遊びとして始まり、紙で雛を作り身の穢れを雛に託して川に流したりした(雛流し)。今の様になったのは江戸時代で、宮中から一般にも広がり豪華になり、大名の嫁入り道具の一品ともなった。また雛あられは、白が雪、緑が芽、紅が命を表すとも。その雛あられを食べる車座の長も女の子、明るく面白い句です。

秀逸句

今月の秀逸句

雛祭り

真壁の里に
春を呼ぶ

ひろ

真壁の雛祭りは平成十五年に四十軒の賛同で始まり、今では百六十軒も参加して町興しの一端をなし有名になった。私にも「真壁町戸口戸口の雛明り」があり懐かしいが、桜川市真壁町も雛祭りの賑わいと共に春が来る。真壁は一一七二年頃に大掾(だいじょう)氏がこの地に来て真壁氏を名乗り、四百三十年間にわたり治めた、歴史の残る町並でもあります。

息子では

雛も飾れぬ

淋しき日

しま

三月三日が近くなると店や今では佐原の街などでも雛飾りが見られる。女性としては雛飾りが好きだが、男の子では仕方ない。五月五日を待つ思いの句です。

雛祭り

可愛い孫の

笑顔かな

てっちゃん

歳を重ねると孫は特別に可愛い、雛祭りに綺麗な着物の笑顔を見ると癒される。大人を今を顧みる句でもあり、子の日の故郷が懐かしい。

女子力の

かくも美し

雛飾り

あお

最近では女性も仕事、政治などへ多く参加する方向で、カープ女子などもあります。最近の雛飾りは豪華で、如何にも世相を思う実感の句です。

流行り知る

スターの顔の

雛飾り

おの

羽子板にもその年の人気者の顔のがありますが、雛にも歌手や女優、アニメに似たのがあります、時の移りを知り、自分の歳を思う句でもあります。

雛祭り

遠き娘を

思ひをり

G

何時の時代でも女性は嫁にいくのが多い。また現代は核家族化で離れて暮らす。嫁いだ娘さんか、或いは何かの事情か、店などの雛飾りを見ると共に暮らした日を懐かしむ句で、私も同じ思いがします。

佳作

雛祭り子供の笑顔うれしいな いるか

みみの日は女性としての祝いの日 かこ

嫁入りの道具に雛も持たせてね ゆうこ

夫々の雛見て一日雛祭り なあな

雛祭りおめかししよふ女の子 たえ

雛様になりし思ひにすまし顔 めい

七段の雛の飾りも一度かな みく

ひな祭り幼き日々を思ひをり ゆめ

ひな祭りいよいよ春を思うかな くま

七段や祖母より孫へ雛飾り まこ

雛祭り我が家の官女姦(か)ま)しき ひろ

雛祭り雛の佳き子を嫁に欲し こば

法廷の嘘と誠と春の雨 ゆたか

桃の香にのせて嬉しい雛祭り あべ

雛祭り孫のほうばるあられかな いげ

ゆかりんと白酒酌まむ雛祭り けん

どっこい私も生きてます～我が回復記～「ブーちゃんの回復記」

第5回

医者だった年配ホームレスの言葉で社会に戻る

誰にも遠慮せずにお酒が飲める環境のホームレスになってからは、いつも酔っていたので、ぼんやりとした記憶なのですが、たまたま浅草の仲見世通りで若い母親と幼い娘にぶつかって、その女の子を泣かせてしまったことがあるんです。別に悪気があった訳じゃないんですけど、世間から見たら僕らは役立たずの浮浪者にすぎない。露骨に嫌な顔をされただけじゃなく、母親も幼い女の子もとてもおびえた表情だったんです。その時、一緒に行動していた年配のホームレス仲間が「俺たちは悪の標本だな」と口走りました。自虐的な意味を込めてつぶやいたのかもしれませんが、僕にはその言葉がとても重く心に引っかかりました。酒を飲みただけで加わった“にわかホームレス”生活でしたが、やはり完全な世捨て人にはなれなくて、どこかで自尊心みたいなものが邪魔していたんです。

その年配ホームレスに呼ばれて、「お前、もう十分だろう。そろそろ“宛て場”に戻れ!」って言われたんです。“宛て場”というのはホームレスの隠語らしくて、一般社会のことです。一口にホームレスといっても、百人いれば百通りの人生を背負っています。いろんな人がいて、それぞれに人生物語がある。たった4か月弱でしたが、浅草でのホームレス生活は僕にとって得難い人生勉強の場となりました。で、その年配のホームレスなんですけど、詳しい事情は分かりませんが、本人が言うには内科のお医者さんだったらしいんです。奥さんも子供もいて仕事も医者ですから、他が羨むほどだった。順風満帆な人生だったのが、ある時火事で家族全員を失い、自分も死のうと思ったが死ねなかったそうです。それ以来、生きる希望をなくし、「もう俺の残りの人生はこれでいいんだ」とホームレスになったというんです。医師の証明書を見せてくれた事がありましたし、話しぶりから高い教養が伺え、それなりの人格者でした。

昔から「乞食は三日やったらやめられない」と聞いたことがありますが、最初の1～2カ月はとても苦しみました。でも、3カ月目辺りになると、不思議な事に順応していくんです。だんだんと世間の目も気にならなくなります。タガが外れたように社会に対する諦めの気持ちが大きくなり、妙な幸福感が湧くんですね。「もう俺、これでいいわ」って。だけど、その人は公衆トイレ裏に隠しておいた背広と古い靴、千円札30枚を僕に差し出して、強い口調で言いました。「ここまで落ちた俺たちに、この世に存在している意味があるとしたら、それは悪の標本としてだよ。社会にとっての反面教師。お前みたいな若いやつには、まだまだ未来がある、可能性もある。人生捨てるには早すぎる。もう人生勉強は十分だろう。(野宿生活の)ここにはだめだ。もう宛て場に戻れ!」。そんな出来事があって、僕は社会に戻ることにしました。(次号に続く)

3月のバースデイ

あーさん



第一のことは第一に

けん

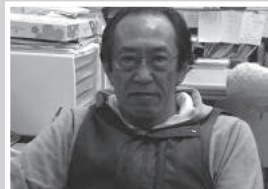
潮騒に来て5年、
今は平安です。

ごろう



1年は早いですね

ひろ



色々あんだよ。

はま



担当とむ

はごろも



頑張ってください

りゅーま



?

3月の行事予定

- 3月7日 川崎マックフォーラム
 3月10日 潮騒俳句会
 3月12・18日 秋元病院メッセージ
 3月19日 潮騒運動会

4月の行事予定

- 4月9・15日 秋元病院メッセージ
 4月13日 潮騒俳句会
 4月23日 潮騒家族会
 4月30日 潮騒アディクションセミナー

献金・献品を頂いた方(3月15日現在)

- ・K&G 企画 様 ・内堀高良 様
 ・横堀 様 ・弁護士 安重洋介 様
 ・毎日新聞社 様 ・千葉由利枝 様
 ・栗原 稔 様

運動会献金

- ・増古四郎 様 ・家族会一同 様・佐久間修 様

今月も献金・献品をいただきました。心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。
 おかげさまで潮騒JTCは、回復のためのプログラムを実践することができておりますことをご報告いたします。今後ともご支援くださいますよう、なにとぞ宜しくお願い申し上げます。

※その他匿名の皆様からも献品・献金をいただきました。ありがとうございました。

※発送作業簡略化のため、振込取扱票は全員の方に同封させていただいております。
 どうぞご理解のほどをお願いします。

編集後記という名の独り言

庭に咲いた梅の花が散るのを待つかのように、桜の花が咲き出した。今年は例年よりも開花が早いような気がする。春は生きとし生けるものを目覚めさせ、どことなく気分を高めてくれる。でも依存症という厄介な病魔に魅入られた人達には、手放して喜べる環境ではないようだ。季節の変わり目でもあるこの時期は、依存症も広義の「心の病」に括られるだけに抑うつ的なったりして、ダルクや潮騒では精神的に不安定になるメンバーをよく見かける ▼僕がダルクに通い出した約20年前には、覚醒剤とシンナーが依存物質の二大巨頭だったので、暴走族上がり若者と全身入れ墨のよれたシャブ中が主役を張っていた。世間に流布された彼らの怖いイメージとは裏腹に、その精神的なナイーブさと弱さ、生きづらさを本音で吐き出す姿を毎日のミーティングで垣間見て、そのギャップに驚いたものだった。要するに僕の目が曇っていたのだと気づいてからは、一気に(薬物)依存症に対する興味が膨らんだ ▼そして世間の誤解と偏見を解くことを自分のライフワークにしようと、無謀にも考えた。当初、僕の関心の眼目は「どうして精神科医でさえも匙を投げたヤク中が、こんな貧しい居場所で回復するのだろうか？」だった。暇を見つけてはダルクに通っているうちに、そんな思い上がりにも似た徒勞な考えはどうでもよくなった。いつの間にか、この厄介な病気の回復を目指す人達が目の前にいるという、その事実素直に向き合えるようになった。大袈裟に響くかもしれないが、「ここには人間の根源に通じる大切な何か>がある」と直感した ▼その感覚は今も変わらないが、敢えてもの好き(?)な支援職の立場から言わせてもらえば、新たにいくつかの手強い宿題が見えてきた。それは①当事者活動と支援の在り方 ②時に恣意的に語られるハイパーパワーとは? ③ステップは亀裂した人間関係を修復できるか ④霊的な成長という名状しがたい世界は共通語になり得るか ⑤そしてダルクや潮騒はどこに向かおうとしているのか?……の重たい課題である。そう言う「還暦すぎても青臭い性格は抜けないな」「いい加減、少しは人間的に成長しろよ!」などと叱られるかもしれない ▼結局、僕は20年の時間を経て振り出しに戻ったのだろうか? 思考の同心円というか、メビウスの輪というか、あるいは袋小路かは別にして、今月号の栗原センター長の随想ではないが、僕の20年=七千三百日も優れて現在のためにあると信じたい。(市)

潮騒通信 どっこい生きてます! 2017年3号

Contents

- P② 私の「埋め合わせ」は日本中の人達に向かっている
 P③ 潮騒アディクションセミナー
 地域の自助グループメンバーが熱いメッセージ
 P④ 2017 シリーズ企画「潮騒ジョブってどんな施設なの?」
 その2: 女性ハウス「るみの家」
 P⑥ ユタカ VS トム 対談 第14回 [最終回]
 「ユタカはダルクに収まらない人間だ」(近藤恒夫さん)
 P⑧ 女性ハウス「るみの家」
 各種イベントに参加したメンバーの感想集
 P⑨ イチさんの「棚卸」第4回「日記風の回想録」
 23歳の時と同じ失敗をして成長のない自分を思い知る
 P⑩ 受刑者からの手紙
 P⑫ しおさい俳壇「雛祭り」
 P⑭ どっこい私も生きてます「ブーちゃんの回復記」第5回

■ 編集・発行:

特定非営利活動法人
 潮騒ジョブトレーニングセンター(本部)
 〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱 34号
 〒314-0006 茨城県鹿嶋市宮津台 210-10
 TEL:0299-77-9099 FAX:0299-77-9091

潮騒リカバリーホーム(中施設)
 〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱 56号
 〒311-2213 茨城県鹿嶋市中 2773-16
 TEL:0299-69-9099 FAX:0299-69-9098

潮騒スリークオーターハウス 鉢田
 〒311-2113 茨城県鉢田市上幡木 1113-39

E-メール k.s-darc@orange.plala.or.jp
 ホームページ <http://shiosaidarc.com/>



